

実践的知識の原因性
Intention §48 の解釈

東京大学 吉田廉

序

私は知覚や聴覚によって世界のありさまを知るが、世界についての知識を得る方法は認知的機能に限られてはいない。行為し、世界のありさまを変えらるることによっても、私は世界についての知識を得ることができる。世界に関する受容的な知識とは対比される、行為に関する自己知を「実践的知識」(practical knowledge) の名のもとに取り上げ、現代に復活させたのは G・E・M・Anscombe である。行為者が実践的知識を有しているということ、すなわち自分が何をしているのか理解しているということは、合理性、自律、自由と並ぶ行為者性の基本要件である。本論文は彼女の著作 *Intention* の解釈を通じて、実践的知識とは何であり、何を手掛かりにそれが明らかになるのかを論じる。

議論は次の順序で進む。まず、*Intention* における「実践的知識」に関する考察の概略を論じる(第一節)。続けて、実践的知識の原因性は〈作用因ではなく形相因である〉と主張する主流の解釈(形相因解釈)を検討する(第二節)。形相因解釈を批判し、実践的知識の原因性は〈作用因でありかつ形相因である〉と主張する Schwenkler の解釈を検討する(第三節)。そして、Schwenkler による四原因説を補助線とする解釈を補足・改良した上で、その問題点を指摘する(第四節)。最後に、質料形相論を補助線とすることで、Aristotle の魂と Anscombe の実践的知識の同型性を指摘する(第五節)。

1. 実践的知識の原因性

実践的知識とは、行為に関する自己知である。*Intention* において、この概念はやや唐突な仕方で登場する。§32 で、古代や中世の哲学者が「実践的知識」と呼んだものを、近代の哲学は完全に誤解してしまった、ということが語られる。誤解の結果生まれた、知識とはそれに先行する実在を後から写し取るだけのものにすぎない、という近代的な理解が、われわれが哲学的な隘路に陥る原因であると Anscombe は診断を下す。この隘路から抜け出すためには実践的知識を正しく理解せねばならない。そのためにはまず実践的推論を理解せねばならないと彼女は宣言し、続く §33 から §44 まで実践的推論

を論じる。そして、§ 45 から本の終わりにかけて、これまでの考察をまとめる形で実践的知識を論じる。

§ 48 で Anscombe は *Intention* の議論を要約する形で、Aquinas の『神学大全』の一節（第 2-1 部第 3 問題第 5 項異論 1）を引用する。以下のテキストを T1 と呼ぶことにする。

[T1] これらの考察をまとめると、(a) 出来事の記述が、形式的には遂行された意図の記述であるようなタイプのものであり、(b) 出来事が（件の基準により）実際に意図の遂行である場合、実践的知識の本性について Aquinas が与えた説明が成り立つ。すなわち、「静観的」知識が「知られる対象から得られる」のとは異なり、実践的知識は「それが理解するものの原因」である。（§48）

ここで彼女は二つの条件 (a) と (b) を提示しており、条件が二つとも満たされた場合には、実践的知識に関する Aquinas の説明が妥当すると述べている。「それが理解するものの原因」といった難解な表現を中心に、T1 は様々な解釈を生み出してきた。以下では、T1 の前後の文脈を補いながら、可能な限り中立的な解釈を与えることを試みる。まずは、(a) と (b) の条件について解釈する。

(a) の「形式的には遂行された意図の記述であるようなタイプ」の出来事の記述とは、§ 47 に登場する「生命的記述」のことである。Anscombe はそこで生命的記述を「自発的、ないし意図的でのみあり得る記述」と説明している。たとえば、私が知り合いに向かって軽く頭を下げるとき、そうした行為は「私は知り合いに挨拶をしている」と記述できる。そして、私の身体運動をそのように記述するときには、挨拶という行為を私自身がしており、その行為が挨拶の一種であると私が知っていることが前提されている。つまり、「S が ϕ している」という記述が「S は自分が ϕ していると知っている」を含意するとき、 ϕ は生命的記述である（S は人物、 ϕ は行為動詞）。(a) の条件は、出来事の記述が生命的記述のクラスに属することを述べるものである。

次に、(b) の条件は、出来事が実際に行為者の意図の遂行であること、すなわち、意図的行為であることを述べるものである。「件の基準 (our criteria)」とは § 16 で要約されている意図的行為の基準である。詳細は省略するが、Anscombe の基準では、生命的記述が妥当する出来事は必ず意図的行為である。しかし、意図的行為には必ずそれに妥当する生命的記述が存在するわけではない（たとえば、蹴ることは意図的行為であり得るが、「蹴る」

は非意図的の行為も記述するので、「蹴る」は生命的記述ではない)。

二つの条件を併せて理解しよう。(a) と (b) の条件は、出来事の記述が生命的記述のクラスに属し、生命的記述が実際に意図的の行為を記述するものであることを述べるものである。次に、「実践的知識の本性について Aquinas が与えた説明」について確認する。

Intention の記述のみを読む限り、Aquinas の引用が意味しているのは、行為者の静観的知識は、知識とは独立に存在するものが原因であるのに対し、実践的知識は、実践的知識の対象たる意図的の行為の原因であるということだ。たとえば、窓の外を見ることで得た「雨が降っている」という静観的知識の原因、すなわち降雨は、私がそれについて知識を有するかどうかに関わらず存在するものである。しかし、私が挨拶をするとき、その原因は「私は挨拶をしている」という実践的知識であり、当該の行為は実践的知識がなければ存在することも、意図的の行為として記述することもできない。

ここで実践的知識の説明には、(a) と (b) の条件が課されていたことを思い出そう。実践的知識が、実践的知識の対象の原因であるのは、知識の対象となる出来事に生命的記述が実際に妥当する場合である。このことを現代的な哲学用語で言い換えるなら、自己知が構成的条件であるタイプの意図的の行為の原因は、当の自己知である、となるであろう。

Anscombe は T1 の主張に関して、続く個所で二つの特徴付けを与えている(それぞれ T2, T3 と呼ぶことにする)。

[T2] このことは、多様な結果を生み出す必要条件として実践的知識をみるということ、あるいは、云々のことを云々の仕方ですということ観念(idea) がそうした〔必要〕条件だということ以上のことを意味する。

[T3] それの意味するのは、それ〔実践的知識〕なしには、われわれがその諸特徴を探求してきたところの——意図の遂行という——記述に、起きたことは当てはまらないということである。

T2 は T1 に対する否定的な特徴付けである。実践的知識は意図的の行為たる出来事が起きるための必要条件であるという以上のことを主張している。一方、T3 は積極的な特徴付けである。行為者が実践的知識を有しない場合には、出来事は意図的の行為として記述されない。

以上の読解から、実践的知識の対象である意図的の行為に生命的記述が妥当する場合には、意図的の行為の原因は実践的知識であると Anscombe が主張していることがわかった。次節では、この主張が何を意味すると解釈されてきたのかを確認する。

2. 作用因ではなく形相因である——形相因解釈

実践的知識の対象の原因は実践的知識それ自体であるという T1 での Anscombe の主張は、知識の理解として特異なものであるだけでなく、原因の理解としても特異なものである。現代において X の構成的条件を X の原因と呼ぶのは特殊な用語法であろう。解釈者は実践的知識の原因性が特異なものであることを強調するために、実践的知識の原因性は〈作用因ではなく形相因である〉という補助線を § 48 に引いてきた。この補助線を妥当なものとしみなす解釈を「形相因解釈」と呼ぶことにする。本節では、形相因解釈の様々なバリエーションを紹介し、その問題点を指摘する。

形相因解釈を採る確認できる限りもっとも古い解釈者は、Hursthouse である。彼女は T1 において Anscombe が静観的知識に与えた「知られる対象から得られる」という特徴付けの「得られる」と、実践的知識に与えた「それが理解するものの原因である」の「原因である」の両方について、因果説的な解釈を退け、「形式的な優先性や一致の責任 (a formal priority or onus of match)」を意味していると解釈する¹。そして、彼女はこうした原因性を「形相因」と言い換えている。

さて、ここ [T1] でいう「得られる」とは、単に「因果的に得られる」という意味ではない（もっとも、静観的知識の多くは、知られている対象から因果的に由来しているに違いないが）。それはむしろ形式的な優先性や一致の責任を示しているのである。知識と想定されているものが[実際に]知識であるためには、知識はその対象と一致しなければならない。例えば、私が意図的に壁を黄色に塗っていて、あなたは私がそうしているという観察的な信念を有しているとしよう。すると、あなたの信念は、私がそうしているがゆえに知識であり、古い用語で言えば、私がそうしていることがあなたの知識の（形相）因である、ということになる。

(Hursthouse 2000, 102f. [] 内は引用者の補足)

彼女の解釈では、静観的知識の形相因は観察される当のものである。そして、実践的知識の場合では事態は逆転し、実践的知識は意図的行為の形相因である (Hursthouse 2000, 103)。あるものが知識の形相因であるとは、その当のもののおかげで (in virtue of) それが知識になるという意味である。しかし、その意味は曖昧であり、一致の責任というアナロジーとどのように両立するのかが明らかではない。後の論者と異なり、彼女は静観的知識の説明にも形

相因という語彙を用いており、作用因と形相因の対立は、静観的知識と実践的知識の対立に重ねられてはいない。

実践的知識の原因性に観察的な知識のあり方に類同化できない特異なものを見出した点において Hursthouse の解釈は優れていた。以後、実践的知識の解釈には〈作用因ではなく形相因である〉という補助線が多用されることになる²。しかし、以下に見るように、どの解釈も Hursthouse とは異なる意味で「形相因」を用いており、解釈の強調点も様々である。

ここで、形相因解釈を採る Hursthouse 以降の論者の解釈を概観しておこう³。Moran は T1 を意図は行為の因果的先行条件ではなく、出来事の記述を決定するものだという主張と解釈し、実践的知識の原因性は、〈作用因ではなく形相因である〉と主張する (Moran 2005, 54)。Newstead は形相因解釈にコミットした上で、実践的知識の原因性が作用因でないことは Anscombe が Aquinas に言及していることから「明らか (obvious)」であると述べている (Newstead 2006, 193)。Stoutland は Anscombe の実践的知識論が誤読されてきた理由を、T1 の「それが理解するものの原因」が形相因であるという「Anscombe の主張」を見落としているからだと指摘している (Stoutland 2011, 14)。Setiya は Anscombe を信頼性主義的に解釈する Velleman を批判し、形相因解釈を提示している (Setiya 2016, 78)。彼は Anscombe の「行為の原因」(Anscombe, 1983) という論文を参照し、意図と行為の関係は因果関係ではないという解釈を裏付けている。Campbell は形相因解釈を支持し、実践的知識の原因性が形相因であることを「ある行為者が ϕ しているという実践的知識をもつだけで、その人が ϕ していることは、その人の ϕ する意図の遂行とみなされ、彼女が意図的に行うこととみなされる」と言い換えている (Campbell 2018, 18)。

形相因解釈を採る論者は〈作用因ではなく形相因である〉という言い回しを共有し、実践的知識の原因性が〈形相因である〉ことを説明を要しない自明の事柄とみなしているが、解釈上の共通点がどこにあるのか見出すことは難しい。ここに形相因解釈の問題点がある。実践的知識の原因性に特異なものを見出したという点で形相因解釈は優れていたが、形相因という語彙は意味の上でブラックボックスと化してしまっている。それは解釈にとっては余分な要素であり、私が第一節で「形相因」という語を用いずに解釈した以上の内容を、〈作用因ではなく形相因である〉という補助線は与えていない。

本節では、形相因解釈を概観し、それが解釈の補助線として機能していない点を批判した。次節では、形相因解釈を批判する Schwenkler の解釈を検討する。

3. 作用因でありかつ形相因である——Schwenkler の解釈

§ 48 の解釈が困難を極めるのは、実践的知識という概念自体の難解さに起因する面もあるが、T1 が Aquinas の引用という形態をとっていることが大きく影響していると思われる。これまで扱ってきた解釈者は、Anscombe の主張が Aquinas との連関において理解すべきものであることを匂わせながら、Aquinas のどのような主張との連関において理解すべきかを明確化してこなかった。Aquinas のテキストに立ち返り、Anscombe の実践的知識論の属する哲学史的なコンテクストをはじめて明確化したのが Schwenkler である。彼は Anscombe の実践的知識論を、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教の哲学者たちが論じてきた神の実践的知識論の系譜に置き直そうとする (Schwenkler 2019, 156)。彼曰く、中世の哲学者たちは、創造された世界に関する神の知識を説明するために、実践的知識の概念に訴えてきた。神はすでに存在していた世界について知識を得たのではない。創造された世界は、神がそれについて知識を有するが故に、存在するのである。こうした知識のあり方を認める伝統に、Anscombe が引用する Aquinas も属する。

彼は Anscombe が引用している『神学大全』の個所は、*Intention* の読解には有益ではないとして、Aquinas の実践的知識論全体を参照する。彼が Aquinas から取り出すのは、神はある対象を、単にそこにあるものを心に映し出すだけでなく、自分の知識によってその対象を存在させる者となることで、知ることができるという考えである。Aquinas による神の実践的知識のこうした理解が、§ 48 で Aquinas を引用した際に Anscombe の念頭にあったと彼は主張する。また彼は、Aquinas 的な神の実践的知識論に、Aristotle の形相因を重ねて理解しようとする。

ここで、われわれが検討していた Aquinas 的な〔実践的知識の〕定式化に立ち返ろう。自らの行為についての行為者の知識は、それが「理解するものの原因」である限り、実践的知識である。彼女〔Anscombe〕の解釈者の何人かが指摘しているように、自分の行為に関する行為者の自己知が行為自体の構成原理であるという Anscombe のテーゼは、Aristotle の形相因の概念を喚起することを意図していると思われる。Aristotle にとって形相因とは、特定のもものがそれに当てはまる定義を説明する「形相または原型」である。(Schwenkler 2019, 172. 引用参照は省略した。)

彼は『自然学』第2巻第3章を参照して、実践的知識の原因性を四原因の一つである形相因と同一視する。そして、行為に関する自己知を行為者が有していることで、その行為が「出来事の記述形式」に当てはまることを、「形相因」の語でパラフレーズしている。

Schwenkler の解釈は形相因解釈と二つの点で異なる。第一は、彼が形相因の意味を Aristotle の用法に直接紐付けている点である。彼の解釈では「形相因」という語は余分なブラックボックスにはなっていない。第二は、彼は、実践的知識の原因性が〈作用因ではない〉ことを否定する点である。彼は T2 を根拠に作用因であることは否定されていないと論じる。

——なぜなら、彼女のテーゼは、実践的知識が「様々な結果を生み出す必要条件」であること以上のことを意味しているという Anscombe の注意は、少なくとも、その意味〔作用因〕をもつこととも両立するからである。(Schwenkler 2019, 173)

実践的知識は意図的行為が生じる必要条件以上のことを意味しているという主張は、実践的知識が必要条件であるという主張とも両立する。彼は、Aristotle 自身も、技術や know-how を、それによって生み出されるものの作用因として扱っており、Aquinas も神の知識を被造物の作用因として扱っていることに注意を向ける。こうして、彼は Anscombe における実践的知識の原因性もまた〈作用因でありかつ形相因である〉と結論付ける。

以上で Schwenkler の解釈の要約は終えて、問題点の検討に移ろう。彼は Aquinas による神の実践的知識論を Anscombe の行為者の実践的知識に重ねている。しかし、神の創造に関するモデルが、人間の意図的行為に関するモデルとなり得るだろうか。万能の存在である神にとって創造は可謬的な行為ではあり得ないが、人間の行為はつねに失敗の可能性を抱えている。仮に、神の創造を人間の意図的行為のモデルとみなす理由があったとして、それが *Intention* の読解として妥当であるかは疑問である。Schwenkler は、神の実践的知識の対象である人間、人間の実践的知識の対象である意図的行為という同型性を Anscombe の念頭にあったものと想定しているが、そうした前提を彼女が受け容れていたとみなす十分な根拠は提示されていない。それどころか Anscombe の他のテキストを参照すれば、Schwenkler の解釈に反する記述は見出される。たとえば、Anscombe は *Intention* と同時期に執筆した論文「現代道徳哲学」において、道徳の根拠を神が道徳的存在であることに求める Sidgwick に対して、Aristotle の「称賛は俗悪である」という言葉を引用して反論している

(Anscombe 1958, 34)。ここで彼女が指摘しているのは、神 (Aristotle においては神々) をわれわれと同じく道徳的行為の主体であるとみなすことの不適切さである。欲求や、それを有するがゆえの葛藤をもたない神の行為を、道徳的行為として称賛するのは的を外している。それゆえに、道徳的主体として捉えられた限りの神を、人間の実践のモデルとすることはできない。*Intention* が、神なしの行為者性の理論 (心理学の哲学) を構想していると考えるなら、神に関する Aquinas の議論の援用は危険な補助線であると思われる。

本節では、形相因解釈を批判する Schwenkler の解釈を要約し、Aquinas の議論を Anscombe の議論にそのまま重ねている点を批判した。次節では、Aristotle の四原因説そのものに立ち返ることで、Schwenkler の議論を補足・改良することを試みる。

4. 四原因説

Schwenkler の提示する〈作用因でありかつ形相因である〉という原因性の理解はキマイラ的であるようにも思われるが、彼が参照する Aristotle 自身が『自然学』の第 2 巻第 7 章で、作用因・形相因・目的因は大抵の場合は一致すると述べている。作用因と形相因の一致について、Ackrill は次のように説明している。

作用因と形相因がある意味で同一であるという考えは、以前の議論においても予感されるものであった。パイを作るのはパイ作り、あるいはもっとおし進めれば、その「変化の始原」〔作用因〕は、パイ作りの心のうちにあるパイの観念〔*thought*〕である。こうして、人工品の場合には、これこれのものを生み出すのは、これこれのもの (の観念) である。生物の場合には、これこれのものを生み出すのは現実のこれこれのものである。(Ackrill 1981, 40)

行為を人工物の一種とみなすことができるのであれば、Aristotle の主張は、行為の原因は行為者 (の思考) であるという T1 と同型の主張である。このように作用因と形相因の一致という論点を Aristotle に立ち返って理解するなら、T2 の解釈も Aristotle の四原因の理解をもとに、改良できるように思われる。なぜなら、Aristotle において自然物が生じるための必然的条件とみなされているのは、Schwenkler が解釈するのとは異なり、質料因だからだ。四原因説を補助線とする限り、T2 は実践的知識の原因性が一

—作用因以上のものではなく—質料因以上のものであることを述べるものと解釈するのが妥当だろう。こうして、実践的知識の原因性を作用因と形相因の一致によって説明する方途が見出されたのだろうか。しかし、Anscombe が Aristotle の主張をそのまま受け容れていると考えるのは早計である。

Ackrill は四原因説についてあり得る誤解を避けるために次のように補足をしている。少し長いが引用する。

これは四つの「ゆえに」の説とでも呼んだほうがよいかもしれない。Aristotle は「なぜ」とか「何のゆえに」とかいった問にあたえることができる答の相異なる種類を区別しようとしているのである。それらのうちで、われわれが普通に使う「原因」の用法に近いと言えるのはただ一つ、彼が「変化の始原」と呼ぶもの——伝統的には「作用因」と呼ばれているもの——だけしかない。アリストテレスのこの説に向けられる多くの不当な批判は、「原因」という言葉を訳語として用いなかったなら避けられたであろうが、この訳語は伝統的になってしまっており、一語でもっとよく言い表せる訳語は他にない。それゆえ、以下のことを読むにあたっては、四つのいわゆる「原因」とは、説明となる要因のタイプのことだということを心にとめておいていただきたい。(Ackrill 1981, 36)

「なぜ」の問いに対する答えのタイプは四種類ある、これが四原因説だと Ackrill は解釈する。論文「行為の因果性」(Anscombe 1983)に見られるように、Anscombe もこの Aristotle 解釈を共有している。彼女は論文「行為の因果性」において、「なぜ扉は閉じたのか？」という問いを例に、様々なタイプの答えを列挙してみせ、次のように述べている。

こうして、原因の本性に関する一般的な探求は、要因の本性に関する一般的な探求に似ていることがわかる。私たちは Aristotle の四原因を思い出すかもしれない。しかし、四つでは十分ではない。たとえば、[扉が自らの重みで閉まったというときの] 扉の重さは Aristotle のどの項目にも当てはまらない。「唯一の原因(the cause)」という表現を使ってはならないというしばしば繰り返される警告を覚えておく必要があることは確かである。(Anscombe 1983, 91)

「なぜ」の問いに対する答えのタイプは四種類以上ある、Anscombe は Aristotle から離反してこう主張する。Anscombe も形相因を原因性の一つとして認めてはいるが、四原因説を拒絶して、原因の多様性を説く彼女を、四

原因の枠内で解釈するのは困難ではないだろうか。もちろん、後年に書かれた論文の内容を、*Intention* の解釈に持ち込むことには慎重になるべきである。しかし、そもそも作用因・形相因という対自体が、*Intention* には存在しない持ち込まれた概念である。彼女と Aristotle との連続性に注目することは、たしかに Anscombe の思想を解釈する手がかりとなる。しかし、それと同時に、われわれは Aristotle と Anscombe の不連続性にも注目すべきだろう。

本節では、Aristotle 自身の四原因説に立ち返ることで、Schwenkler の解釈の補足・改良を試みた。その上で、*Intention* の議論に四原因説をそのまま持ち込むことの問題点を指摘した。次節では、質料形相論を補助線として、Aristotle の魂に関する学説と実践的知識論の同型性を論じる。

5. 質料形相論

本節では「原因」という観点から一度離れて、実践的知識と意図的行為の関係そのものについて論じる。その補助線となるのは、質料形相論である⁴。前節では、T2 が質料因に言及している可能性に触れ、質料因とそれ以外という対比を提示した。より確かな内容上の同型性を持つのは、質料・形相という対比であると思われる。契約行為を例に、Aristotle 自身の彫像の例との対応をみてみよう。たとえばハチ公の彫像は、銅という質料と、ハチ公の姿という形相から構成されている。これと同様に、契約するという私の行為は、「私は契約をしている」という実践的知識（形相）と意図的行為（質料）から構成されている。形相はそれが何であることを説明すると同時に、それを当のそれとして記述可能にする。形相と質料のこうした関係は第一節で解釈した T3 の内容に一致する。

しかし、実践的知識と意図的行為の関係には、質料形相論に収まらない部分もある。ハチ公の彫像を構成する同じ質料たる銅は、溶かされてヘルメットの姿をとることがあり得る。また、同じハチ公の姿形が大理石を質料として彫像となることもある。しかし、意図的行為と実践的知識の関係の場合にはこうした偶然性はない。実践的知識はつねに意図的行為の形相であり、形相を欠いた意図的行為はもはや意図的行為ではない。たとえば、私がそれを契約だと知らずにした契約は、契約ではない。それは、無効な契約である。この意味で、実践的知識と意図的行為の関係は必然的な関係である。

そして、Aristotle の哲学においても、必然的な関係にある形相と質料が存在する。それは、魂と身体である。Aristotle は魂と身体を形相と質料の語で

説明しているが、両者の関係を必然的なものとして扱っている。彼によれば、魂という形相が失われた身体、すなわち死んだ身体は、もはや身体ではない。これは Anscombe が意図的でしかありえない行為を記述するタイプの記述を「生命的記述」と呼んでいたことを連想させる。Aristotle の魂-身体と Anscombe の実践的知識-意図的行為の関係が同型であることは、*Intention* が「適切な心理学の哲学」(Anscombe 1958, 27) であると読む一般的な解釈を裏付ける⁵。「心理学の哲学」で意味されているのは現代的な心の哲学のことではなく、人間が生きているということと本質的に結びついた、魂の能力の学のことである。

以上で明らかになったように、Aristotle の魂に関する学説と同様、Anscombe の実践的知識論も四原因説や質料形相論には収まらない側面を持つ。実践的知識の原因性を Aristotle の哲学を手がかりとして解釈するのであれば、着目すべきは形相と質料の必然的關係であると思われる。

6. 結論

本稿でなされたことは以下の通りである。実践的知識の原因性を〈作用因ではなく形相因である〉と解釈する形相因解釈、これを批判し四原因説を補助線として〈作用因でありかつ形相因である〉と解釈する Schwenkler の解釈を確認した。前者に対しては、解釈として前進していないことを指摘し、後者に対しては、四原因説を補助線とする問題点を指摘した。形相因の代わりに質料形相論を補助線とし、Aristotle の魂に関する学説と Anscombe の実践的知識論の同型性を指摘した。実践的知識の原因性は、実践的知識と意図的行為の必然的關係を中心に据えて解明されるべきであるということを明らかにした。

凡例

Anscombe 1963 からの引用は節番号で行う。引用文のうち、文献表に邦訳の記載のあるものはこれを参考にしたが、基本的に引用者が訳した。ページ数は原典のページ数である。引用文中の傍点は原文のイタリックに対応している。〔〕内は引用者の補足である。

注

¹ こうした原因の理解は突飛なものに思われるが、「原因」と訳される古典ギリシア語の τὸ αἴτιον が「責任の帰するところ」という意味を有すること

を念頭においてのことであろう。

² Paul は「新 Anscombe 主義者」たちとして、Michael Thompson、Sebastian Rödl、Candace Vogler、Richard Moran、Martin Stone、Matthew Boyle、Douglas Lavin、Kieran Setiya、J. David Velleman を挙げている。新 Anscombe 主義者の特徴として挙げられているのは、行為を意図的にする、行為と行為者の心的状態の間の適切な因果関係とは作用因であって、形相因ではないというテーゼを支持することである (Paul 2001, 5)。しかし、Ford が指摘するように、この指摘は妥当とは言い難い (Ford 2015, 141)。たとえば彼女が新 Anscombe 主義者として挙げる Thompson は形相に関する独自の理論を展開しているが、形相因解釈を採用していない。彼は実践的知識が「それが理解するものの原因である」とは「行為者の行為に関する自己知は、それによって知られるものについて産出的であり、反省的ではない」ことであると、自己知のあり方に引き寄せて解釈している (Thompson 2008, 96)。

³ 作用因であることを明示的に否定はせず、〈形相因である〉ことのみを認める論者には Gjelsvik がいる。彼は実践的知識の原因は「Aristotle 的なく形相因〉の概念」とみなされねばならないと、Schwenkler と同じく Aquinas ではなく Aristotle に言及している。さらに彼は、形相因とは「それが何であるかの説明によって示される形相」であると説明する (Gjelsvik 2017, 4)。

⁴ 本節の質料形相因の問題点の整理と理解は Ackrill 1981 および中畑 2001 を参考にしている。

⁵ 以下を参照のこと。古田 2021, 290f.

文献表

Akrill, J., *Aristotle the Philosopher*, Oxford: Oxford University Press, 1981. [邦訳：山口義久 [訳] , ジョン・L・アクリル『哲学者 Aristotle』, 紀伊國屋書店, 1985.]

Anscombe, G. E. M., 1958, 'Modern Moral Philosophy,' reprinted in *Ethics, Religion and Politics (The Collected Philosophical Papers of G. E. M. Anscombe, Volume 3)*, Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 1981, pp. 26–42. [邦訳：生野剛志 [訳] , G・E・M・アンスコム「現代道徳哲学」, 大庭健 [編]『現代倫理学基本論文集 III』, 勁草書房, 2021, pp. 141–181]

———, 1963, *Intention*, second edition, Oxford: Blackwell.

———, 1983, 'The Causation of Action,' reprinted in *Human Life, Action, and Ethics*, M. Geach and L. Gormally (eds.), Exeter: Imprint Academic, 2005, pp. 89–108.

Campbell, L., 2018, 'Two Notions of Intentional Action? Solving a Puzzle in Anscombe's *Intention*,' *British Journal for the History of Philosophy*, 26: pp. 578–602.

Gjelsvik, O., 2017, 'Anscombe and Davidson on Practical Knowledge: A Reply to Hunter,' *Journal for the History of Analytical Philosophy*, vol 5, no. 6, pp. 1-11.

Ford, A., 2015, 'The Arithmetic of *Intention*,' *American Philosophical Quarterly*, 52: pp. 129–143.

Hursthouse, R., 2000, 'Intention,' in *Logic, Cause and Action*, R. Teichmann (ed.), Cambridge: Cambridge University Press, pp. 83–105.

Newstead, A., 2006, 'Knowledge by Intention? On the Possibility of Agent's Knowledge,' in *Aspects of Knowing: Epistemological Essays*, S. Hetherington (ed.), Amsterdam: Elsevier, pp. 183–202.

Moran, R., 2004, 'Anscombe on "Practical Knowledge,"' in *Agency and Action*, J. Hyman and H. Steward (eds.), Cambridge: Cambridge University Press, pp. 43–68.

Paul, S., 2011, 'Deviant Formal Causation,' *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 5: pp. 1–23.

Schwenkler, B., 2019, *Anscombe's Intention: A Guide*, Oxford: Oxford University Press.

Setiya, K., 2016a, 'Anscombe on Practical Knowledge,' in *Practical*

Knowledge: Selected Essays, Oxford: Oxford University Press, pp. 156–168.

Stoutland, F., 2011, 'Introduction,' in *Essays on Anscombe's Intention*, A. Ford, J. Hornsby, and F. Stoutland (eds.), Cambridge, MA: Harvard University Press, pp. 1–22.

Thompson, M., 2008, *Life and Action*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

中畑正志, 2001, 「解説」, 中畑正志 [訳], アリストテレス『魂について』, 西洋古典叢書, pp. 214–281.

古田徹也, 2021, 「監訳者解説」, 大庭健 [編]『現代倫理学基本論文集 III』, 勁草書房, pp. 261–323.